

湯浅八郎先生追憶のことば

上野直蔵

敬愛する湯浅八郎先生の略歴をご披露し、併せてこの世にあられし時の、数々に思いをいたし、先生の召命によるご偉業を偲ぶよすがといたし度いと存じます。

湯浅八郎先生は、去る八月十五日、それはまさに敗戦記念日でありました、I C UおよびY M C Aの理事長等の現職のまま昇天されました。先生は瘦身で食の極めて細かい方、いまにも折れんばかりの人でありましたが、九十一歳の天寿を全うせられました。これみな先生が心にわだかまりを抱かない人、平和をこよなく愛される信念のキリスト者であられたからであります。まさに烈々の人湯浅八郎でありました。

先生は新島 襄の没年、すなわち、明治二十三年（一八九〇年）四月二十九日、クリスチャンの家庭湯浅治郎夫妻の第八子として、東京・赤坂に生れ、父母の京都への転居により、蛤御門前の家で成長され、同志社普通学校を卒業されましたが、ご卒業の前年の四月、十七歳の時、同志社教会において受洗されました。これが先生の生涯の方向付けとなり、キリスト者としての人生観を培かう契機となりました。同志社普通学校ご卒業の年の八月、アメリカに永住して「ただ



神と人との前に正しい生活をした」という願望をいだいて渡米されました。ところがアメリカの農園で重労働を続けられるその体験の中で、自ら、人間は学問をしなければいけないと痛感され、大学進学を決意されました。時に一九一一年（明治四十四年）、先生二十一歳でありました。そして、ついにその九年後、イリノイ大学の大学院で昆虫学を専攻してPh・Dの学位をうけられました。この時期に先生とYMCAとの関係ができ、それが孤独であった先生の生活に幅をもたらすこととなりました。

一九二二年、シカゴで鶴飼清子さんとご結婚、続いて新婦のすすめもあって、京都帝国大学に増設された農学部への招へいをうけいられられ日本に帰国されるのであります。先生の後年の述懐によれば、この教授時代の十二年間が生涯の最も幸福な時期であった、とされています。

ところが一九三五年（昭和十年）、同志社は先生に総長就任方を懇請しました。先生も根からの同志社人のこと、この要請を応諾されました。しかしながら時代はすでに国を挙げて軍国主義の波風が日増しに強く吹きすさみ、キリスト教主義を奉ずる同志社はその強い暴風をともに受けねばなりません。岩倉の同志社高商に起った神棚事件、国体明徴問題で総長に上申書を提出する党派の事件、さらに特異な性格の配属将校の配置等による学内騒ぎようなどが続発しました。これに対して「同志社はキリスト教をもって徳育の基本となす」という同志社の

綱領を死守するリベラリスト湯浅総長はついに退陣のやむなきに至りました。まことに痛嘆のきわみであります。「百鬼夜行」といふことばがあるが、当時はむしろ百鬼昼行の時代であった」と戦後苦笑まじりに述懐されたのを思い出します。

先生はその翌年にはマドラスで開催された世界キリスト教宣教会に日本代表として出席のためにインドに渡られ、さらにその大会のメッセージを人々に伝えるため渡米され、各地で平和のために巡回講演に従事、日米開戦後もアメリカに留まり、在米日本人の救済活動などに尽力されました。

以上のようなわけで、先生は、日本人を送還する交換船上の人とはならず、人を介してご令息の洋君に遺言として『ロマ書』第十二章を托されました。因みにこの章の最後の句は「悪に負けてはいけない、かえって、善をもって悪に勝ちなさい」とあります。

さて、戦争は終わりました。国破れて、山河はあったものの、戦時中、いやそれにおとらず日本人は食物の窮乏に苦しみました。そうした時、先生は日本に帰国され、同志社は再び先生に総長にご出馬を乞いました。(昭和二十二年四月就任)この度は前回とは状態が全く異っておりました。先生は水を得た魚の如く、新制度の大学等に大いに新風を吹きこめました。先生は、大学教育というものは基礎を築くことが大切であるという確固たる信念に基いて、リベラル・アーツを熱心に提唱され、アセンブリ・アワー、チャペル・アワー、およびコーヒール・アワーなどを設けて人間形成の実をあげるべく努力を払われましたが、新制大学で先生の最大の悩みは、立派な教育をしようとするれば、経費が多くなる、という点にありました。これを克服するべく、地方入学試験、特別奨学金制度、夏期大学等いろいろの新しい試みを他の大学に先じて試みられましたが、理想とする大学

づくりは容易ならざるものがありました。

このように、先生にとって創るよるこびとその苦しみの結合のはざまに悩まされていられた折も折、先生がかねてからその発議者の一人であられたICUが創設されることとなり、結局、先生はその初代総長となって完全な処女地において第一歩から理想の大学づくりをされるべく、同志社総長を辞されることとなりました。

爾来、国際基督教大学総長を十一年間、続いて理事長、その他、京都市芸協会会長、国際学生の家理事長、京都文化院院長、京都ポストン委員会委員長、新島学園理事長、等、長年に亘って世のため、人のために粹骨碎身の努力を払われたのであります。

最後に先生の信仰の告白を先生ご自身の言葉で表現して結びといたします。

先生はその昔『信仰と生活』の中で、ご自分の祈りの対象としての神とは「宇宙を創造し、その進化をしろしめす、全智、全能、全愛にしていまざるところなき人類の父なる神」といわれるのでありますが、ここにすぐれた自然科学者湯浅八郎理学博士の自然を冷徹に見つめた眼を通して神に参入されたお氣持がよく判るような気がします。「草は枯れ、花は散る、しかし、主の言葉はとこしえに残る。」(『ペテロの第一の手紙』第一章、二四)という認識があるように思えてなりません。また、先生の九十一年の人生を貫く信条としては「生きていることは愛すること。愛することは理解すること。理解することは赦すこと、赦すことは赦されること。赦されることは救われること。そうして初めて人間として、生涯がまっとうできる。」と結んでいられます。キリスト者、湯浅八郎の自由が脈々と生きているではありませんか。

(同志社総長)